

追憶のマーシャル

ビキニ事件70年

■4■

ビキニ事件にとつて、この10年は法廷闘争の歩みと重なる。

訴訟への罪をこじ開け、敗れ、再び闘いへ。現在、国などを相手取った訴訟の原告団長を務める下本節子さん(73)＝高知市家ノ原＝は、亡くなった父や仲間のため先頭に立つ。

「国に内部被曝を認めさせ、米国に追隨した政府に責任を取らせる。負けられん裁判です」

◆ きつかけは10年前、2014年9月だった。政府は、米国によるマーシャル諸島・ビキニ環礁で

遺族の闘い

核問題 訴える使命

の水爆実験の際、周辺にいる、公的資料の存在。訴訟への道に光が差した。2年経った文書を初めて開示した。厚生労働省が「ない」と言い続けたものだった。元船員らの証言を裏付け、高知地裁に起こす。全国で

初めてのことがあった。下本さんは遺族代表として原告団に加わった。父の大黒船兵衛さんは、窓戶のマグロ船に乗っていて被曝し、78歳で亡くなった。生駒、ビキニのことを何も話さなかった。父の口を閉ざしたものは何だったのか。下本さんにとって裁判とは、国が隠した事実を明かす闘い。父の人生を知る場でもあった。

「この10年で、とても多くのことを知った。下本さんは、被曝を認めた父親が抱えている不安や恐怖が今なら分かる気がする。」「父のことを言え、いらいらない。知つたことを伝えたいといけない。核問題を訴えることが、自分の使命かなと思う」



裁判の弁論を終え、支援者に報告する下本節子さん。多くの人の思いを背負って立つ(高知市丸ノ内2丁目の高知城ホール)

「国が資料を隠し続けた」という主張は認められなかった。原告団は控訴した。その一人、元船員の増本和典さん(高知市)は、がんと闘いながら控訴書に参画していた。ある時、下本さんにつややいた。「僕らは認められる」とした判決の世に行きかけた。でもま

「増本さんの言葉がよみがえった。『ああ、この気持ちを聞いたら、私もやらないといけない』。支援者たちも『原告らが被曝した事実が認められる』とした判決の一文に、かすかな希望を

見いだしていた。下本さんは闘い続けることを決めた。

「この10年で、とても多くのことを知った。下本さんは、被曝を認めた父親が抱えている不安や恐怖が今なら分かる気がする。」「父のことを言え、いらいらない。知つたことを伝えたいといけない。核問題を訴えることが、自分の使命かなと思う」

現在、高知地裁では国への損失補償を求める訴訟、東京地裁では船員保険の適用を求める訴訟が進む。20年3月の2度目の提訴から間もなく4年。結末のめどは立っていない。

ビキニ事件は今なお続いている。(山崎達也)